

## 国際化

六八

村 島 義 彦

(一)

「さて、現代社会の各方面にその顔を覗かせる「国際化」のうねりを承けて、今日、これに関わるトピックが大きくマスコミ界——さらには教育界——を賑わしているけれども、そうした場合にしかし、「国際化」という言葉の本身は、果たしてどれだけ鮮明に把握されているのだろうか。いささかの危惧を覚えないわけではない……」

「相当に手厳しい指摘ながら、なるほど、この言葉の使用頻度に比べて、中身の把握はかなりムード的で曖昧か、はたまた、抽象的・観念的な印象を拭きたいのは否めないところだ。そうした意味では、「国際化」をめぐる諸論は、論として豊かに噛み合うためにも、これに先立ついくつかの地ならし作業を強く求められているのかもしれない」

「ならば、そのような作業は、どうした方向に展開されてしかるべきなのか、ひとつ、君の思うところを開陳してもらおうか」

「これはまた単刀直入な申し入れで、いささか戸惑いは隠せませんが、まことに面白いテーマでもあり、あえてお誘いに乗ることにしましょう。とはいえ、わが内に抱懷されている中身は、いまだ十分に整理されているとは言いがたく、アイディアの域に留まって、語るに足る結論を欠いてはいますけれども……」

「それで結構。およそ人間に係わる事象の数々を具体的に扱いながら、なおかつ理路整然とした明確この上ない結論に漕ぎつけるなど、よほど

の「力業」でも用いないかぎり、まずは難しいと考えられてよいのだから。要は、取り上げられたテーマが（人間学的に）意味で、それを扱うプロセスが（やはり人間学的に）生産性をもつなら、それ以上にあえて欲張る必要もあるまいしね」

「励ましのお言葉に感謝しつつ、目下のテーマに係わった、わたし個人の目下の関心事を率直に披露すると、たとえば「外なる国際化」と「内なる国際化」、「大きな国際化」と「小さな国際化」、さらには、これらが織りなす具体的な関係模様とでもなるでしょうか」

「なかなか意欲的なネーミングで、当の中身への期待もいつそう膨らんでくるのだが、ともあれ、われわれの基本姿勢を改めて確認しておくに如くはない。すなわち、敬愛するソクラテスに倣って身近な日常例に訴えつつ、ここでは、できるだけ具体的に考察していくとしよう。たとえば、結果が、取り上げた問題への「無知の知」に終わろうとも、その中で、問題自体の問題性が——どうして「無知の知」に終わらざるを得なかったかも含めて——いくばくかでも浮かび上がってきたなら、やはり、一応の成果として前向きに評価するという人間学的な姿勢を堅持しながら……」

「つまりは、論そのものの展開を、具体的な日常例で押さえつつ、あくまでも観念と抽象に流れないこと——これを、基本の姿勢に掲げようというわけですね」

「まことに結構。こうした姿勢を貫くなら、そもその「国際化」はどのような姿で登場してくるか。その結果は、これまでに語られてきたところと大差がないにしても、できるだけリアルに描き出せたなら、ソクラテスもやはり白い目では眺めないにちがいない」

「ならば、あら削りを承知で、目下の思い描くところを率直に披瀝してみましよう。世にいう「マナ板の上の鯉」として・・・」

## (一)

「さて、「国際化」が声高に叫ばれる背景には、いうまでもなく、政治・経済・通信・教育などの各分野で大々的に進展する「国際社会」の出現がありました。そこで今、この「国際社会」に係わっていささか原理的な考察を巡らせてみるとして、まず手初めに「国際的」という邦語に該当する英語をかなり大胆に拾い出すと、たとえば、どうしたものが浮かび上がってくるでしょうか」

「ざっと四つぐらいが頭に浮かんでくるかな。まずは「インターナショナル」、次いで「マルチナショナル」、さらには「トランスナショナル」や「コスモナショナル」なども・・・」

「全くもって同感です。これらはそれぞれ、文脈は異なっても、相共に「ナショナル」という邦語の対極に置かれるのですから。けれども「ナショナル」の対極に置かれる点を共有しながらも、それらは、微妙に中身を異にしているのでしょうか」

「その点は否定できないな」

「そこで今、話を進める便宜上、(1)の「inter-national (相互国家的)」を①、「multi-national (複数国家的)」を②、「trans-national (超国家的)」を③、「cosmo-national (世界国家的)」を④という風に番号化

するならば、①と②の場合、当の「international」や「multinational」が成り立つには、それに先だって複数の「national」がすでに存在していなくてはなりません」

「なるほど、あくまでも「national」を基本単位として、それらが組み合わせられた複合的全体が、あるいは「international」であり「multinational」であるのだから」

「これに対して③と④の場合、「transnational」や「cosmonational」が成立する上に、必ずしも「national」の先在が前提される必要はないように思われます。前者は、後者の組み合わせを待ってはじめて存在を主張できる複合的全体とはいささか趣を異にしたからです」

「(1)にいう「transnational」や「cosmonational」は、何も「national」を前提しなくとも存在し、逆に「national」はむしろ「transnational」や「cosmonational」という文字通りの全一体を便宜的に区分した部分単位に過ぎない、というわけだね」

「ええ、ここにみた発想は、ご承知のように「インターナショナル」vs「グローバルイズム」の名で広く世に喧伝されているのですが、われわれの基本姿勢に従って、今、できるだけ具体的なモデルを用いてイメージすると、①と②はアメリカ型に、③と④は日本型に該当する、と形容できないわけでもありません」

「という意味は・・・」

「周知のように、アメリカの正式名は「USA (United States of America: アメリカ合衆国)」であって、この国は、五十の州からなる共和的複合体にほかなりません。基本単位はあくまでも州 (State) で、そうした州を前提としてはじめて合衆国 (United States) は成立するのです」

「要するに「はじめに州ありき」であって、国 (= 連邦) の方は、いかならば便宜上の行政単位にすぎない、と言いたいわけだね」

「ええ、これに対して日本の場合はというと、まさに正反対と考えるかはありません。というのもわが国では、なるほど（州に該当する）都道府県はあるにしても、こうした都道府県の集合体として国があるというよりは、国自体がまずあって、その便宜上の行政単位として都道府県が設けられていると考えた方が、いっそう実情に添うのですから」

「それは・・・そうかもしれない」

「あるいは大学を例にとつても、アメリカでは、各州にあるのは州立大学であつて、連邦大学など何処にもない——あるとすれば陸軍士官学校（ウエストポイント）や海軍士官学校（アナポリス）でしょうか——のに対して、日本では、各々の都道府県にあるのは国立大学のいうならば分校であるように、そもそもの立脚の中心が、日本とアメリカで真反対なのはおのずと明らかでしょう」

「なかなか巧みに裏を取っているな」

「そのお褒めに励まされて、さらに今ひとつ、日本の連立政党と自民党の派閥にもモデルを求めてみましょう。すでに今は昔、新進党・社会党・民社党・新党さきがけなどが連立し、自民党から政権を奪取した異変（？）がありました。この連立政党では、基本の単位はあくまでも個々の政党で、それらが共通の目標を奉じて結束した結果、そこに連立政党が誕生したわけです。これに対して自民党の内部は、さまざまな派閥に区分され、党としての運営もこうした派閥の力学に大きく左右されているもの、そうした派閥も、つまりは自民党あつての派閥であり、党の存在を欠くなら派閥としての存立も当然におぼつきません。ここでは、自民党が主（ないし先）で派閥が従（ないし後）となつていますが、連立政党ではしかし、この関係が逆転して、各政党が主（ないし先）で連立政党が従（ないし後）となつています」

「要するに、わが国の政党をモデルにするなら、先の①と②は連立政

党型に、③と④は自民党（の派閥）型に該当する、というわけだね」

「まさにその通りで、世にいう「国際社会」は、基本イメージの上で①と②③④と④——正式には「インターナショナルリズム」<sup>24</sup>「グローバルリズム」——の二つに類別できると思われます。こうした類別はしかし、実のところ、どちらに妥当の軍配を上げたものでしょうか」

「なるほど、基本に据えるイメージの差は、必ずや、これに依拠した個々の営為に波及して、しかるべきシワ寄せをもたらさずには措かないだろうからね」

「この点はしかし、今のところは整理も不十分で、とうてい答えらしい答えを提示できません。だからというわけではありませんが、この結ぶのをご容赦ください。国際社会を云々するにあたり、われわれは、当の「国際社会」を自らでどうイメージしているかの実際を、少なくとも各自で一応は意識化しておく必要があるのだ、と」

「アメリカモデル、あるいは連立政党モデル（つまりは「インターナショナルリズム」）で捉えているか、それとも日本モデル、あるいは自民党モデル（つまりは「グローバルリズム」）で捉えているか、の確かな見定めのみでも十分に意味はあつて、そう欲張るには及ばないというわけか。一応は了解しておこう」

### (三)

「ところで「国際化」を論じるにあたり、先の「国際社会」に並んで今一つ、同等に有力な手掛かりとして「国際人」があるのではないでしようか」

「面白いところに目を付けたな」

「ここでも、われわれの基本姿勢をまじめに踏襲して、その具体例を過

去に求めるなら、たとえば『ペルシア戦史』を執筆した古代ギリシアの歴史家ヘロドトス、『東方見聞録』をまとめたヴェネツィアの旅行家マルコポーロ、さらには、鎖国期の日本からアメリカに渡ったジョン万次郎などの名があるいは挙げられるかもしれません」

「ヘロドトスに、マルコポーロに、ジョン万次郎か・・・それなりに分

「最初のヘロドトスは、当時のギリシア世界のはるか彼方まで足を延ばし、さまざまな国の風物・習慣・伝統・体制・人種等々に接してそれらを克明に記録しましたが、当人はおそらく、あまたの異世界を旅する中で数々のカルチャーショックを味わいつつ、おのずと、自らの背負うギリシア世界の固有性を対自化していったにちがいありません」

「わたしの記憶するところでは、確か、足を踏み入れた場が、生まれ故郷の田舎ポリス（小アジア西南部のハリカルナッソス）からサモス島、ひいては、北は黒海北岸のスキュティア、南はエジプト、東はファニキアのチュロスとメソポタミアのバビロンにまで及んで、かれは、こうした大旅行での見聞を糧に、ギリシア本土に戻ってアテナイに腰を落ち着け『戦史』の執筆に取り組んだのではなかったか」

「ええ、これだけの異世界を踏破した人間は、当時としては稀であり、ヘロドトスは、今日でいう「国際人」の走りにほかなりません。当人の意識も、異世界体験をくり返す中でおのずと、それに見合う拡張をくり返したはずで、これ自体は『戦史』の前半部（全九巻中の四巻まで）が本題の戦争叙述とは直接に関係しない、まことに幅広い地誌的・風俗史的な叙述で占められているという、特異さの中に、その一端が垣間見られることでしょう」

「なるほど」

「こうした事情は、マルコポーロの場合もさほど異ならなかったと思わ

れます。ヴェネツィアという当時のヨーロッパ世界の経済的中心の一つで、ヨーロッパの何であるかを徹底して身に染み込ませた当人が、あくまでも単身、人種・習慣・言葉・食事・服装のまるで異なるアジア世界（モンゴル帝国）に身を置いた時、どれほどの驚きがその身を襲ったか。そのようなアジア体験をへて改めて故国に辿り着いた当人の目に、ヨーロッパ世界はおそらく、以前とは異なる顔を覗かせたにちがいありません」

「マルコポーロ自身の意識が拡大し、視野と視力を変容させて、同じ景色を別様に捉えさせた、というわけだね」

「ええ、有名な『東方見聞録』は、これの必然的所産と考えられてよいでしょう。さらにはジョン万次郎の場合も・・・」

「嵐に逢って土佐沖で遭難し、運よくアメリカの捕鯨船に救われて——しかも船長に気に入られて——海を渡り、アメリカの教育を身に付けたのち、運よく帰国して幕末の日本で貴重な活躍をしたのだからね」

「そうした当人の内面を覗き見ると、そのアメリカ体験はさまざまな驚きやショックで多彩に染め上げられていたはずで、これらが、やがては故国の舞台で大きく華を開いたわけなのです」

「了解」

「もつとも、あえて昔日のヘロドトスやマルコポーロやジョン万次郎を引き合いに出さなくとも、今日のわれわれは、国際化の恩恵に浴しながらかなり頻繁に、かれらの実体験を、簡潔に、なぞっているのかもしれない。あまりにも身近となった海外旅行は、ショック度の差はあっても、大なり小なりヘロドトス体験（ないしはマルコポーロ体験ないしは万次郎体験）を垣間見させてくれるのですから」

「その点は否定できないな。たとえば「日本人の何であるかを知ろうとすれば、日本人の世界に身を置いてあれこれ考えるよりは、アメリカ人

なりインド人なり中国人の世界に飛び込んで、そこで味わわれる数々のカルチャーショックを介して、おのずと体得するに如くはない」と広く人口に膾炙しているけれども、物事の姿はおしなべて、異質の物事を対置させた場合に驚くばかりに浮かび上がってくる。単なる物見遊山のバカンス旅行ならいざ知らず、好奇に溢れてやや大胆（かつ冒険的）に異国を旅したなら、よほどの鈍感でないかぎり、何らかのカルチャーショックを味わわないでは済まないものだ」

「ええ、われわれはすべて、生まれ育った故国（の文化）を身に染み込ませた、その意味では「生きた故国」にほかなりません。そうである以上、他国への足の踏み入れはおのずと、異質のカルチャー同士の出会い——ないしは衝突——を招来し、これ自体がショックを生まないはずはないのですから」

#### (四)

「ところで、このような異質のカルチャー同士が出会うそもその舞台は、まさしく当人の内面を措いてないとすると、世の「国際化」には大きく「外なる国際化」と「内なる国際化」の二面がある、と考えられてよいでしょう」

「ようやく二つの国際化が、満を持して、登場したわけだね」

「ええ、いわずもがなの説明を蛇足で加えますと、前の「外なる国際化」は、年齢に応じて進展する各人の活躍舞台の拡がりを、後の「内なる国際化」は、それに見合った当人の意識の拡がりをそれぞれ意味しています」

「マルコポーロに当て嵌めるなら、故国のヴェネツィアから他のヨーロッパ諸国へ、さらにはシルクロードの各地をへてモンゴル帝国にまで

足を延ばすといった活躍版図の拡がりに応じて、当人の意識も、各地・各国の異なるカルチャーを取り込みつつ生活舞台のサイズに見合う拡大をくり広げた、というわけか」

「その通りで、「外なる国際化」に見合った「内なる国際化」を抜きにして、まっとうな「国際化」など望むべくもあるまい、と訴えたいのです」

「これには全面的に同感ながら、ただしかし、そう訴えるだけでは十分といえまい。いうところの「まっとうな国際化」は、果たして、それほど苦もなく成就できるのだろうか。どちらかというと、うまくいかない場合が少なくないのでは・・・」

「要するに、これを成就させる具体的方途もさらに示さないなら、結局は「画竜点睛を欠く」と誇られても仕方がない、と仰りたいわけですね」「かなりきつい注文ながら、これに向けた前向きな汗を期待してみたい。どこまで出来るかは棚に上げるとして」

「つまところ、ささやかな満足など捨てて決意を取ってみろ、というわけですか。ならばこちら覚悟を固めて、まずは、いうところの破綻の実例を身近な日常に求めると、たとえば、世にいう「事業拡大の落とし穴」などがまずもって挙げられるかもしれません」

「なるほど、景気の上昇気流に乗って事業の規模をワン・ランクばかり拡げると、当然、それに見合うワン・ランク上の運営が必要になり、これに応じるには、経営者の意識もやはりワン・ランクは拡大していかなくてはならない。それはしかし、かなりの難事で、倒産などの失敗例として報告される半数近くは、事業の規模拡大に経営者の意識拡大が追い付かなかつた人間悲劇なのだ、と広く語られているからね」

「さらには、組織内での地位の上昇とそれに応じた当人の意識面での拡大がうまく噛み合わないと、そのような出世が重荷となって、ついには

当人を潰し去るケースも数多く報告されています」

「うん」

「すでに張られた意識の縄張りは、このように、改めて張り直そうとすれば思った以上の抵抗に出会うのですから、そうした張り直し作業に今ひとつ自信の持てない人は、あえて現状拡大に手を染めることなく、自らの欲を抑えて、今ある状態に踏み止まるのが一応の得策かもしれません」

「なるほど」

「それについても「外なる国際化」に取り組んでいる当人の内部で、「内なる国際化」は、実際にはどれほど進行しているのでしょうか。かなり危ういと考えるのは、果たしてわたし一人なのか否か……。というのもも世にいう「国際化」は、久しい前から叫ばれてきながら、一向に衰える気配をみせないからなのです」

「われわれが胃の存在を強く意識するのは、実に、胃そのものが強く異常を訴えている時なのだ、という卑近な日常体験に学ぶなら、こうした傾向は、逆に「国際化」自体が期待通りに進んでいない状況をそつと裏書きしている、と解釈するわけだね。なるほど、目下の実情に照らすと、こうした解釈の妥当性はほとんど否めないかもしれない」

「ともあれ「国際化」がそれほど厄介だとすると、では、その因はどこにあるのでしょうか。ここに的を絞って、以下、ささやかな考察を加えてみましょう」

「段々と熱が入ってきたな」

「思うに、一般の歴史書では、原始共産制から私有財産制への移行が大きな社会の流れとして捉えられています。加えて、昨今の共産主義社会もほぼ例外なく、私有財産制をベースとした自由競争社会に大なり小なり宗旨替えを迫られて、これを着実に果たしつつありますし、さらに付

け加えるなら、わが国でも古代の公地公民制は、いつの間にか荘園制（＝私地私民制）に替わり、中世末でも、中央から任命された守護大名は「下克上」を逞しく生きる戦国大名に荒々しく取って代わられました」

「それで……」

「こうした事態を虚心に眺めると、土地・財産の公有一般は、より深いところで人間本性に大きく反しているのではないかと疑いたくもなってきます」

「うん」

「公有（ないし共有）よりは私有が、もし仮に人間の本性により近いとするなら、これに抗する方向はよほどの強権でも発動しない限り、あるいはよほどの奇跡にでも出会わない限り、そもそもの実現はまず困難と考えた方がよさそうです。ならば、これほど面倒な「私有」問題の底に、そもそも、どうした人間的パトスが認められるのでしょうか」

「『私有の底にあるパトス』とは面白い。で……」

「かなりの露骨を承知で答えるなら、それは、われわれに共有された執拗この上ない『縄張り意識』に相違ありません」

「ほう、『縄張り意識』とは初耳だ」

「ざつと周囲を見渡してください。魚の世界ならアユ、鳥の世界なら雷鳥、動物の世界ならサルなどの縄張りがわけても有名ですが、われわれ人間も決してこれに劣るものではありません。たとえば、国の縄張り、地方自治体の縄張り、各部署の縄張り、家の縄張り、個人の縄張り……これらをめぐるイザコザの数は、イザコザ全体の中で異様に高い比率を占めているのですから」

「そういえば、こうした事情を勘案して、かつて立花隆も『エコロジー的思考のすすめ』で、確かこう呟いていたっけ。「これほどまで人間の本性に深く根ざしているなわばり根性は、やはり大切にしなければならな

い。なわばりなく、私有財産否定の社会的な実験がこれまでのところすべて失敗しているのも、このなわばり本性に反していたがためだろう。その意味では、共産主義の「新しき村」も同じ愚を犯している。また同じ意味で、性の解放による家族制度の破壊も夢に終わるだろう」とね

「まことに同感で、われわれの「縄張り意識」の根深さは、やはり、生物的本性に深く根差しているのかもしれない。外なる私有制度は、内なる縄張り意識に支えられて揺るぎのない市民権を確保している、と言つてあなたがち過言ではないようです」

## (五)

「さて、世の「国際化」が抱える最たる課題の一つとして「外なる国際化」と「内なる国際化」の呼応如何を挙げ、これのいかに困難かを「事業拡大の落とし穴」などの日常例に訴えてざつと裏書きしてきましたが、そこではしかし、マクロ世界（＝国際社会）とミクロ世界（＝国家社会）のアナロジーが暗々裡に前提されていなかったでしようか」

「マクロ世界とミクロ世界のアナロジー……ね」

「それというのも、当の「国際化」を検討する上で用いられてきた素材は、そのほとんどが「国際社会」からでなく「国家社会」から借り受けられていたからなのです」

「なるほど、国際社会を舞台にした「インターナシユナリズム」のグローバルズム」を鮮明に視覚化するべく、あえて国家社会に類例を求めて「アメリカ社会」の「日本社会」「連立政党」の「自民党の派閥」といった具体例を紹介した中にも、それは、おのずと表明されていたからね」

「そうしたアナロジーに基づくなら、世の国際社会でくり広げられる正銘の国際化は、いうならば「大きな国際化」と命名され、対して、世の

国家社会でくり広げられるこれのミニ版は、いうならば「小さな国際化」と命名されてよいかもしれません」

「いよいよ二番目の二つの国際化のお出ましというわけか」

「ええ、ここでお尋ねしたいのですが、われわれは、こうした発想の偉大な先駆者としてどうした人物の顔を思い浮かべるでしょうか。ざつとで結構です、思い当たる名前をお答えください」

「唐突な問いにいささか動揺は隠せないが、あえてご期待に添うなら、たとえばプラトンなどはどうだろう……」

「わたしも同感です。ところでそれは、どうした理由に基づくのでしょうか。わたしばかりが語るのもあまりに芸がないようなので、ひとつ、バトンを譲らせてください」

「要するに、先輩に華を持たせよう」というわけか。そのやさしさを汲んでざつと説明すると、プラトンは、主著である『国家』において正義とは何かを探求するにあたり、まず最初、人間の魂の中にこれを求めたけれどもうまく見出すことができず、探求の対象を当の人間から国家に転じることにした。ゆえに、この作品の主題は「国家」と命名され、副題の方は——その中身を反映して——「正義について」と命名されているわけだが、ではなぜ、これほど簡単に対象の転換が行なわれたのか」

「ええ」

「プラトンに従うなら、その理由はこうであった、「なぜなら、小さな対象よりは大きな対象の方が、正義の発見もいっそう容易に思われるからだ」とね。けれども今日の感覚では、人間と国家の間かなりの相違が予想できて、双方のアナロジーはそれほど肌馴染まないのではあるまいか。プラトンの当時はしかし、人間はいうならば「ミクロ・コスモス（小宇宙）」であり、対して国家（ないし世界）はいうならば「マクロ・コスモス（大宇宙）」であって、双方は、たとえミクロ（小）とマクロ（大）

の差はあっても共にコスモス（秩序体・宇宙）に変わりはなく、基本的な構造と力学を共有していると考えられていた。先に紹介した「小さな対象（＝人間）」と「大きな対象（＝国家）」という言い回しは、こうした通念をそもそもの背景に持っていたのである——ざっとこんなところで解説としては十分かね」

「さすがは先輩です、何よりのエールをありがとうございました。人間と国家を、さらには広くミクロの世界一般とマクロの世界一般をアナログカルに捉えるプラトンの発想は、しかしながら、改めて吟味してみるとさほど馴染みの薄いものでもなさそうです。たとえば人間をモデルに仰いで、機械のできる限りの「人間化」をはかる先端のロボトロニクス（ロボト工学）やサイバネティクス（制御工学）なども、一応は、そうした発想のバリエーション（応用的変形）に数え入れられてよいのですから」

「加えて、われわれの日常に目を向けても、生れ落ちて最初に属する家族世界、次いで属する学校世界、さらに次の会社世界等々は、相違点よりは類似点（ないし共通点）に着目するかがり、構面や力学面で——スケールや複雑度を別にすれば——かなりの重なり合う部分を具えているのは否定できません。そうした共通性に立脚するなら、われわれの「社会化」と平行した活動舞台の拡大（家族→学校→会社等々）は、いうならば「小さな国際化」にほかならず、われわれは実に、単なる個人世界から家族世界の一角に、さらに長じて学校世界の一角に、もっと長じて会社世界の一角にと所属するグループをその都度に拡張しながら、つまりは未来の「大きな国際化」の具体的なリハーサルをくり返している、と解釈されてよいでしょう」

「なるほど、リハーサルか」

「ここでのリハーサルは、活動の舞台をさらに広げて自らの故郷から他

の地域に、さらには日本全土にまで及ぶかもしれません。ついには国内を飛び出してわが国から他国に、そしてアジアに、ひいては世界全体にまで至るために・・・」

「要するに、ミクロ世界における目下の「小さな国際化」を介して、われわれは、マクロ世界における将来の「大きな国際化」を簡単になぞっている、というわけだね」

#### (六)

「およそこのように、国家社会という一種のミクロ世界で「小さな国際化」を実践しながら、われわれは、将来の「大きな国際化」に向けて貴重なリハーサルをくり返しているとして、その「小さな国際化」においてすら、先に指摘した問題——「外なる国際化」と「内なる国際化」の対応——は厳しいハードルとして重く立ちはだかつていました。そして、ハードル自体の底には、生物的本性に根ざした「縄張り意識」の執拗さが垣間見られたのですが、とはいえ、このような状況はあくまでも人間の事実であって、洋の東西・古今を問わず、あまねく人間が舐めてきた歴史的苦汁にほかなりません。とするなら、これに向けた具体的対応もおのずと従来から図られてきたはずで、以下、そうした試み（と目されるもの）のいくばくかを身近な日常の中に探ってみましょう」

「いよいよ佳境を迎えたようだね」

「まず、ここにいう「縄張り意識」ですが、これは、もっと美化するなら、時代の脚光を浴びる「プライバシー意識」と言い換えられてよいかもしれません。プライバシー自体は、自分の領域とそうでない領域をしっかりと区画する無言の線引きをその前提にしていたのですから」

「なるほど」

「この線引きはしかし、外界からの各種の介入（ないし干渉）を防ぐ得たい防波堤としてポジティブに機能すると同時に、逆に、われわれの意識の拡大を阻害する厄介な足枷としてネガティブに機能する場合も少なくありません。そのような後者の弊に対して、では、どのような工夫が現実に行われているでしょうか」

「先を進めてもらいたい」

「たとえば、わが国の衆参両議院制度もこうした一例にちがいありません。というのも、衆議院では地方区選出議員が主力を占めるのに対して、参議院では逆に、すべてがすべて全国区選出議員となっていたからです」

「これがなぜ、弊を防ぐ工夫と結びつくのかな」

「話を続けさせてください。議員たるもの、当選してはじめて議員である以上、当然ながら、選出母体ないし選出基盤の声に耳を塞ぐことはできません。あまりに耳を貸しすぎると、単なる地域エゴの代弁者に成り下がって、とうてい国政に携わる議員とは称せられないでしょうが、かといってあまりに耳を塞ぎすぎると、肝心の当選が危うくなって議員の資格を失いかねない——このデイレンマを解消するべく導き出されたのが、そもそも選出基盤を異にする二様の議員システムでありました」

「なるほど、一方は国全体の声に耳を傾け、他方は、特定地方の声に耳を傾けるといふ、各自の土俵を重視した分業システムというわけか。たしかに、これ以外に妥当な現実案など見当たらないかもしれないな」

「このような次善の策は、たとえば、衆議院における議員選出の仕組みにもそつと顔を覗かせていました。そこでは周知のように、比例代表区と地方選出区がきつちりと併用されていたからです」

「あえて説明のバトンを引き継ぐと、こうなるだろうか。すなわち前者では、政党の得票数に応じて登録された名簿の上位から当選が決まり、当選した議員は、自前の選挙区を持たない党直属の議員となるのに対し

て、後者では、自らの力で自らの地方区を勝ち抜かなければ議員への道も開けない。こうした特色から比例代表区の議員は、固有の地盤を持たないため、地盤の声に縛られることなく党の活動に参画できるのに対して、地方選出区の議員は、地盤という独自の土俵を誇るがゆえに、そこからの声も無視できず白紙で党の活動に参画はできにくい。互いに一長一短はあるものの、当の議員単独で双方の利点を兼ね具えるのが至難である以上、党という組織内に特化された二種の議員を配置して、あくまでも党全体として双方を兼備する以外に道はないのだ、という風に」

「お見事な代弁をありがとうございます。こうしたシステムはさらに、国政から地方行政に目を転じて、やはり同じく機能しているのではないのでしょうか。すなわち、中央から派遣の上級職員と、地方採用の中・下級職員の併用システムがそれです」

「なるほど、警察組織にせよ役所組織にせよ、お馴染みなのは、中枢に座を占める中央派遣の役人たちと、かれらの指導・監督の下にかれらとコンビを組む形で配列された地方採用の役人たち、といった基本構図であるからな」

「いやしくも公的な機関である以上、中央と地方の連携は必至であり、単に地方のみを視野に収めた——中央にまで視野の及ばない——行政ではさまざまな支障を来すところから、しかも現実には、ポストの上昇に見合う意識の拡大はそれほど簡単に成就しないところから、上級ポストには、中央にまで視野の及ぶ（＝中央から派遣された）人物を、中・下級ポストには、地方のみを視野に治めた（＝地方採用の）人物を配置するという方向で、つまりは「同一人物における双方の併用」という最善の道は棚上げして、「組織全体における双方の併用」という次善の道がしかるべく選ばれているわけです」

「このような併用システムは、なるほど、狙いとしての妥当性は具えて

いても、果たしてまっとうに機能しているのか否かを問うなら、残念なことには、とうてい「ウイ」とは言えないだろうがね」

「ええ、日常に広く耳にするのは、そうしたシステムの上首尾よりは、あくまでも逆に、汚職・背任・隠蔽など不首尾の数々であるのですから。利に駆られ、欲に流され、情に溺れがちな人間の弱さは、よほどの意思堅固に徹さないかぎり、置かれた立場・与えられた地位への誠実を懐柔して、周囲に気安く妥協する基本エートスをいつしか醸成するのかもしれない」

## (七)

「そのような実情に接して、ならば、どのような姿勢が具体的に選び取られるべきなのでしょう」

「お説を拝聴させてもらおう」

「これを考える上でかなり示唆的なのは、「戦争⇌平和の不在」と捉えるか、それとも逆に「平和⇌戦争の不在」と捉えるか、の一般論争であるかもしれない」

「それはまたどうして・・・」

「この論争のポイントは、つまるところ後者が、戦争をこそ常態とみ、対して平和を戦争の中断した束の間の小春日和（⇌例外）とみる。常在戦場⇌観に立つのに対して、前者が、平和をこそ常態とみ、対して戦争を平和の中断した束の間の波乱（⇌例外）とみる逆の立場を奉じている点にあります。「そもそも常態はどちらで、どちらが束の間の例外なのか」をめぐる類似の一般論争としては、この他にも、「病気⇌健康の不在」⇌「健康⇌病気の不在」の対立が挙げられるでしょうし、さらに広く、「悪⇌善の不在」⇌「善⇌悪の不在」（ないしは「闇⇌光の不在」⇌「光⇌闇の

不在」の対立なども挙げられてよいかもしれません」

「それで」

「戦争・病気・悪などを常態とみるネガティブ（？）な立場と、その逆の、平和・健康・善などを常態とみるポジティブ（？）な立場では、しかしながら、いずれを奉じるかで具体的な事態への評定が大きく異なつてこざるを得ないのです。たとえば、この世の生を営む中で何らかの争い・病い・悪に出会った時、われわれの脳裏に「平和・健康・善⇌常態」が動かしがたく刻印されていたなら、そもそも争い・病い・悪はおそらく、ありうべからざる不祥事（アクシデント）として厳しく咎められ、徹底して負の評定を蒙ることでしょう。逆に、そのような争い・病い・悪にたまたま遭遇しなかった場合にも、その幸運は、単なる当然として何らの有難味も覚えられないにちがいません。けれども反対に「戦争・病気・悪⇌常態」が刻印されていたら・・・」

「言わんとするところが読めてきたぞ。その場合には、同じ事態に接しても、そうした争い・病い・悪はおそらく数ある出来事（ハプニング）の一つとして——それゆえ「あっても不思議ではない事柄」として——そう目くじらは立てられないだろうし、逆に、たまたま遭遇しない場合には、得がたい幸運としてその有難味がごく素直に感謝されるにちがいない、というわけか。たしかに「どちらを常態に据えるか」という主体の側の基本姿勢に応じて、同じ事態の評定そのものがポジからネガへ——あるいはネガからポジへ——文字通りに「逆転」するのは、いささか不気味でもあるからね」

「ならば、このような事実から、そもそも何を学び取るべきなのでしょう」

「うん」

「つまるところ「外なる国際化」に比べて「内なる国際化」は、そう器

用に運ばないのが常態であって、たまたま首尾よく運んだならそれこそが例外的な幸運であったと一歩引く形の、ネガティブではあるが醒めた態度こそ、この場合に採られてよい妥当（かつ健全）な態度なのだ、という確信を措いてはいはずです。こうした姿勢を堅持して、いたずらに成果を焦るよりは地道に「内なる国際化」を進めていく以外に、われわれ

の歩むべき正道はないのですから」

「後輩の言わんとするポイントは、つまりは、ここに尽きるわけか」

七八

（了）

（本学文学部教授）